

八宝飯

芥川龍之介

青空文庫

石敢当

今こんとうくわう東光君は好学の美少年、「文芸春秋」二月号に桂川中良

の桂林漫録を引き、大いに古琉球風物詩集こりうきゆうふうぶつししふの著者、佐藤惣之

助君の無学を嗤わらふ。瀟麗しゆくれいの文章風貌あきたに遜あきたらず、風前の玉樹も

若しかざるものあり。唯疑しふ、今君亦せきかんたう石敢当の起源を知るや否や。

今君こんは桂川中良と共に姓源珠璣せいげんしゆきの説を信ずるものなり。されど

石敢当に関する説は姓源珠璣に出づるのみにあらず、顔師古がんしこが急き

就ふしうしやう章ふしうしやう（史游）の註にも、「衛有石※鄭有石癸齊有石之紛如其

後亦以命族石敢当」とあり。その何れを正しとすべき乎か、何人も

疑ひなき能はざるべし。徐氏筆精に云ふ「二説大不相侔亦日用不
察者也」と。然らばその起源を知らざるもの、豈あに佐藤惣之助君の
みならんや。桂川中良も亦知らざるなり。今東光も亦知らざるな
り。知らざるを以て知らざるを嗤わらふ、山客亦何ぞ嗤はざるを得ん
や。按あんずるに鍾しやう馗き大臣の如き、明めい皇夢中に見る所と做なすは
もと素もとより稗ひくわん官まうたんの妄誕のみ。石敢当も亦實在の人物ならず、無むかい
何有うきやうり郷裡の英雄なるべし。もし又更に大おほかた方かたの士人、石敢当の
出処を知らんと欲せば、秋風禾くわしよ黍しよを動かすの辺、孤影蕭然たる
案山子かかしに問へ。

猥談

聞説す、我鬼先生、佐佐木味津三君の文を称し、猥談と題するを勧めたりと。何ぞその無礼なるや。佐佐木君は温厚の君子、幸ひに先生の言を容れ、君が日星河岳の文字に自ら題して猥談と云ふ。君もし血氣の壯士なりとせんか、当に匕首を懷にして、先生を刺さんと誓ひしなるべし。その文を猥談と称するもの明朝に枝山祝允明あり。允明、字は希哲、少きより文辞を攻め、奇氣甚縦横なり。一たび筆を揮ふ時は千言立ちどころに就ると云ふ。又書名あり。筆法遒勁、風韻蕭散と称せらる。その内外の二祖、威な当時の魁儒たるに因り、希哲の文、典訓を貫綜し、古今を茹涵す。大名ある所以なり。然りと雖も佐佐木

君は東坡とうは再び出世底の才人、枝山等の遠く及ぶ所にあらず。この人の文を猥談と呼ぶは明珠めいしゆを魚目うをめと呼ぶに似たり。山客たまたま、偶「文芸春秋」二月号を読み、我鬼先生の愚を嗤わらふと共に佐佐木君の屈くつを歎かんと欲す。佐佐木君、請ふ、安心せよ。君を知るものに山客あり矣い。

赤大根

江口君はプロレタリアの文豪なり。「文芸春秋」二月号に「切り捨御免」の一文を寄す。論旨は昆吾こんごと鋭を争ひ、文辞は卞王べんわうと光を競ふ。真に当代の盛観なり。江口君論ずらく、「星霜けいみを閱

すること僅に一歳、プロレタリアの論客は容易に論壇を占領せり」と。何ぞその壮烈なる。江口君又論ずらく、「創作壇の一の木戸きど、二の木戸、本丸も何時かは落城の憂目うきめを見ん」と。何ぞその悠悠たる。江口君三たび論ずらく、「プロレタリア文学勃興と共に、俄にはかに色を染め加へし赤大根あかだいこんの輩出山の如し」と。何ぞその痛快なる。唯山客の頑ぐわんぐ愚なる、もしプロレタリアに急変したる小説家、批評家、戯曲家を呼ぶに赤大根を以てせんか、その論壇を占領し、又かの創作壇の一の木戸、二の木戸、乃至本丸ないしさへ占領せんとする諸先生も赤大根にあらざるや否や、多少の疑問なき能はず。且山客かつの所見によれば、赤大根の繁殖したるはプロレタリア文芸の勃興以前、隣邦露西亞ロシヤの革命に端を発するものの如し。

もし然りとせば江口君も、古色愛すべき赤大根のみ。もし又君の
為に然らずとせんか、かの近来の赤大根は君の小説に感奮し、君
の評論に蹶起けつきしたる新鋭氣鋭の青年にあらずや。君自身これが染そ
上めあげを扶たすけ、君自身これを赤大根ののしと罵る、無情なるも亦甚しいか
な。君聴きけ、啾しゅう啾しゅう赤大根の哭こく、文壇の夜気を動かさんとするを。
然れども古人言へることあり。「英雄あに豈あに児女の情なからんや」と。
山客亦な厳に江口君が有情の人たるを信ぜんと欲す。もし有情の人
と做なさんか、君と雖いへども遂に赤大根のみ。君と雖も遂に赤大根のみ。

瑯※ 山らうやさんかく客

(大正十二年三月)

×

田中純君は「文芸春秋」のゴシツプの卑俗に陥るを論難し、

「古今の文人、誰か陽物やうぶつの大小を云々せんや」と言へり。我等

も亦田中君の義憤に声援するを辞するものにあらず。然れども卑

俗なるゴシツプを喜べるは古人も亦今人に劣らざりしが如し。谷た

にさんざん

三山、森田節齋せつさい両家の筆談を録せる「二家筆談」と言ふ書あ

る由、（三山は聾つんぼなりし故なり。）我等は未だその書を見ねど、

いちしましゆんじやう

市島春城らいさんやう氏の「随筆頼山陽」に引けるを読めば、古人も

亦田中君の信ずる如く陽物の大小に冷淡ならず。否、寧ろむし今人よ

りも澆瀨たる興味を有したるが如し。

「山陽しばしば画師竹洞ちくどうの大陽物をなぶる。竹洞大いに怒り、

自ら陽物を書き、『山陽先生、余の陽物を以て大なりと為す。拙者の陰莖いんけい、僅かに此かくの如し』とかきて山陽に贈る。画工小田百合座に在り。曰く、『是は縮図しゆくづであらう、原本必ず大なり焉。』

一座大笑す。(是より文人、竹洞を名づけて縮図先生と号す。)

(原文に交へたる漢文は仮名かなまじりに書き改めたり。)

我等は今人は買冠かひかぶらねど、古人を買ひ冠まることは稀まれなりと為

さず。又同じ今人にしても、海の彼岸ひがんにある文人を買ひ冠まることは屢しばしばなり。然れども彼等も実際は我等と大差なき人間なるべし。

或は我等の几側きそくに侍せしめ、講釈を聞かせてやるに足るものも存外少からざらん乎。と言へば大言壮語するに似たれど、兎とに角彼かく

等を冷眼に見るは衛生上にも幾分か必要なるべし。

×

今人を罵ののしるの危険なることは趙甌てうおうほく北の「簷曝雜記」にその好例ありと言ふべし。南昌の人に李太虚りたいきよと言ふものあり。明の崇禎そうてい中に列卿れつけいと為なる。国変に死せず。李自成りじせいに降くだり、清朝定て鼎いていの後、脱し歸る。挙人徐巨源じよきよげんと言ふものあり。嘗かつて之を非笑す。一日太虚の病を訪ふ。太虚自ら言ふ、「病んで将まさに起たたざらんとす」と。巨源曰、「公の寿正に長し。必ず死せじ」と。之を詰なじれば則ち曰、「甲申乙酉に（明の亡びたる「二字欠」の末年な

り。死せず。則ち更に死期無し」と。太虚怒る。これは怒るのも尤もつともなり。更に又巨源、一劇を撰せんす。この劇は太虚及び龔芝こうしほ麓く賊に降り、後に清朝の兵入るを聞くや、急に逃れて杭州に至り、追兵の至るに驚いて、岳飛墓前、鉄鑄の秦しんくわい檜夫人の跨下こかに匿かくる、偶たまこの鉄像の月事げつじに値ひ、兵過ぎて跨下を這ひ出せば、兩人の頭皆血に汚れたるを描けるものなり。太虚この劇の流行を聞き、丁度南昌に来れる龔芝麓と共に、密ひそかに歌伶かれいを其の家に召し、夜半之を演ずるを觀みる。演じて夫人の跨下を出づるに至るや、兩人覚えず大たい哭こくして曰、「名節地を掃はらふこと此ここに至る。夫れ復また何をか言はん。然れども孺子じゆしの為に辱はづかしめらるること此に至る。必ず殺して以て忿ふん念ねんを洩もらさん」と。乃すなはち人をして才人巨源を何

処づこかの逆げきり旅よに刺殺せしめたりと言ふ。按あんずるに自殺けふに怯けふなるものは、他殺にも怯けふなりと言ふべからず。巨源きげんのこの理わきまを辨わへず、妄みだりに今人を罵ののつて畢つひに刀下の怨鬼えんきとなる。常談も大たい概がいにするものなりと知るべし。

(大正十二年)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

八宝飯

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>